



真穴みかんの里
雇用促進協議会

会長 松浦 有毅



みかんの里に広がる 出会いと交流

八幡浜市真穴地区は、「みかんの里」の里「アメリカ村」とよく話題になります。宇和海の風光明媚な光景を見て美味しいみかんが育つのです。みかん作りは117年の歴史があり、昭和39年には「天皇盃」を受賞し、日本一を自負しています。毎年4月2、3日には長女の節句「座敷雛」が催され、数万人の観光客で賑わいます。大正2年、村人は「北針」一つで太平洋を横断、アメリカへ。進取、雄飛不屈の精神が息づいています。

山に美味しいみかん、優しい心根、逞しい精神、先人に感謝し誇りに思っています。

雇用促進協議会の発足（平成6年）

みかんの収穫は手作業で多くの人手を要します。ところが、頼りの近隣農家の高齢化、過疎化が著しく、新たな方向性を模

索していたところでした。そこで着目したのが都会の若い人たちです。みかんの一番美味しい収穫時期に農家に住み込むアルバイター事業を立ち上げました。新たな交流の輪が必ずや生まれるものと信じて地域一丸となり、八幡浜市の力強い指導、支援を受け、協力者を得て発足したのです。

事業の仕組み

まず、各農家より希望人数を取り、求人誌（フロムA）に掲載募集、履歴書の送付をお願いし、合同説明会兼面接の案内（東京都新宿区）を出し、アルバイターを決定します。期間は11月中旬〜12月中旬頃。期間中に2回の休日を定め、1回目は地元（の若者と魚釣り交流会、2回目は松山市への観光遠足を実施しています。

鼓笛隊で大歓迎（第1回目）

バスより不安げに降りるアルバイターたちを真穴小学校児童の鼓笛隊が迎えしました。地域上げての大歓迎です。アルバイターは驚き、感激の様子。そして、1ヶ月。涙々の別れです。家庭の温もりを感じてくれたのでしょうか…？

「オレンジ色のふるさと」CD制作

第二のふるさと「真穴」に、「ありがとう」の気持ちを含めて、アルバイターが作詞し

ました。集会所にアルバイターたち、地元中・高校生、青年団、後継者と多くの人が集い和気藹々の雰囲気の中、レコーディングが行われました。そのCDの見出しには

「みかんの里に誇りに思う歌が出来た！」

この事業の素晴らしさは、単なる収穫作業の戦力以上に、町と村が、生産者と消費者が、理解し合い感じ合う「新しい出会いの場」「交流の場」となり得たことです。その期間は1ヶ月程度と短いのですが、その間家族の一員として里人となり、真から解け合うその強い絆がこの詩を生んだのです。」と印しています。

出会いのふる里

早くもこの事業は14年を経て、延べ860余名の若者が汗を流してくれました。今ではリピーターが増え、定着化にあると思います。

みかんが結ぶ縁、アルバイターたちは、みかんを見る度に懐かしい風景、思い出が眼に心に浮かぶのではないのでしょうか。より豊かな出会いのふる里を目指して。

「ふるさととは、

みかんの花のにはうとき」 山頭火



みかん山にて一休み